Kyoto City Child Rearing Support Center Kodomomiraikan

京都市子育て支援総合センター
こどもみらい館
研究・研修だより

かがやき

Vol.73
2023
10月

令和５年度 第３回・第４回共同機構研修会 ―――― 令和５年６月１４日(水)・７月７日(金)

子どもの発達支援と保護者へのアプローチ

講師　岡崎 達也

(公社)京都市児童館学童連盟事務局主任厚生員（統合育成担当）

現代の子育ては、不安要素が非常に大きくなってきている。保護者は時間に追われ余裕がなく、また情報過多で、その情報に振り回されがちだ。保護者は様々な面で、やり過ぎたり(過保護等)、やらなさ過ぎたり(ネグレクト等)と二極化が懸念される。

発達特性を持つ子どもは「育てるのにコツのいる子ども」(中京大学 辻井正次教授）と言い換えられる。乳幼児期は、その子の特徴を理解してどう付き合うか、どう対応したらいいかということを、一緒に考えるようにすることが支援となる。子どもがわがままだ、保護者のしつけができていないといった、子ども自身や保護者の育児の問題と捉えるのではなく、親の大変さに共感し、専門職として親の困りに対する子育てのコツを見つけ、寄り添った支援をしてほしい。特性のある子どもを育てるのは、日本の従来の育児とミスマッチしやすく、保護者も疲弊していることが多い。まずは、その子のプラス面に目を向け伸ばす、誤った対応によってこじれさせないようにしていくということが、大事なポイントになる。睡眠や食事に関する問題や、抱っこを嫌がる等の困りがある場合、特に保護者はしんどい。

相談機関へつなげる際には、保護者が決断する必要があるが、近年は、小さい子どもを見る機会が少なく自分の子どもが物差しになっているため、我が子の問題に気付きにくい場合がある。また、我が子の姿を問題だと認めたくない親もいる。親の思いを理解しつつ、「子どもが困っている」と言う視点で話をすることが大切だ。児童館や子どもはぐくみ室等地域の身近な場所でも、相談事業や子育て支援事業を実施している。児童相談所だけでなく、ハードルの低い身近な相談機能を利用することも、支援とつながる足掛かりとなる。地域の関係機関について、どのような機関があるか、どんな機能を持つのか等を知っておくことが重要だ。顔の見える関係になっておけば、さまざまな相互連携ができる。ただ、保護者には、相談機関と連携するための許可を必ず取ってほしい。

子どもは困った場面によって行動のアクセル(多動等)を踏んだり、ブレーキ(過緊張等)を踏んだりする。また、園と家庭、父親と母親の前では、見せる姿が違うということもよくある。「対応がまずいからそうなっているのでは」と、互いに責任転嫁するのではなく、違いのある子どもの姿を共有することが最も大事なことだ。しかし、保護者と話す時は、診断用語は使わない。診断が出来るのは医師だけである。

就学の際は、小学校や総合支援学校ではどんな支援があるか等知っておくことが重要だ。京都市の支援の連携ツールとして、個別支援ファイル（相談機関で得た情報を集積して、次の相談の場面に役立てるためのファイル）や就学支援シート等が活用されている。就学時には、学校だけでなく学童保育とも是非連携してほしい（就学支援シートを学童にも送る等)。また、保育者が記載するアセスメントシートとして、TASP(タスプ) CLASP(クラスプ) を紹介する。これらは、今後の支援に活かすため、あるいは、保護者が次の相談のステップを歩むために活用できるツールとなる。

発達特性は、生まれてからずっとその子が持ち合わせている特性であり、変わることはない。集団生活に入る頃から、だんだん周りとの軋轢や行動上の問題が出てくることがあるが、その際の対処を誤ると、メンタルヘルスの問題となってしまう場合もある。ライフステージを通じた切れ目のない支援が求められている。思春期以降もメンタルヘルスの問題に直面しないようにするためには、乳幼児期の支援が重要であり、その支援を次のステージへつなげていくことで子どもが生き生きと生活できれば本当にうれしい事である。

＊上記の要約は、講義をもとに編集したものです。

＊この研修は、ホームページより配信予定です。（詳細は 10/18通知文にてご確認ください）

DVD貸出中

令和５年度 第５回共同機構研修会　　令和５年７月２８日（金）

保幼小連携・接続　～あなたは何をはじめますか

架け橋期の子どもたちに～

講師　大林 照明　佛教大学特任教授

大林先生は，京都市架け橋会議委員及びコーディネーターであり、実際の取組からお話をしてくださったので、自分だったら今から何ができるだろうかと、イメージを膨らませながら、聞くことができました。また、グループ討議の時間もたくさんあり、他校種の先生方の考えに触れ、互いの違いや共通点を考えることができました。グループで考えることを通して、より大林先生のお話も理解しやすくなり、一人一人が新しい発見をしたり、やってみようと気持ちを後押しされたりする研修でした。

○グループで話し合おう！

幼児教育と学校教育の違い

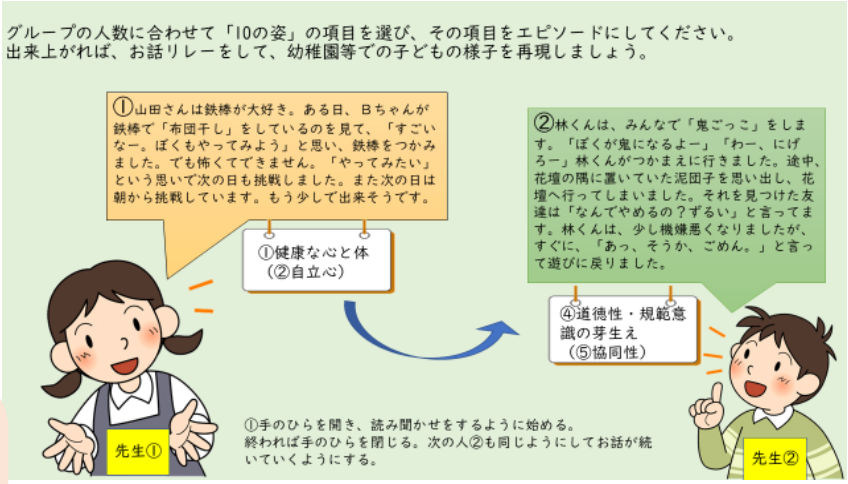
あそびを通して	教科学習を通して
方向目標	到達目標
～を味わう、～を感じる、～を楽しむ	～できるようにする
ねらいは方向付けを重視し生活やあそびを通して総合的に引き出す	ねらいは各教科等の授業（学習）において達成する

子どもの姀を元に話し合うことで、見えてくることがある。そうすると、児童・幼児の理解が進む。そして、連携をどうしていくか、少し見えてくるでしょう。
　実現するため、共通の視点があるといいですね。

幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姀

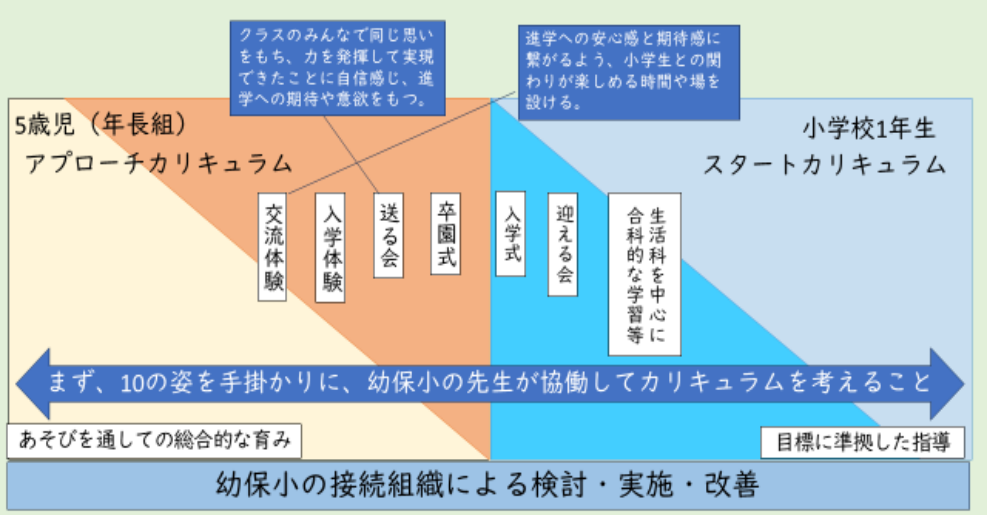
1. 健康な心と体
2. 自立心
3. 協同性
4. 道徳性･規範意識の芽生え
5. 社会生活との関わり
6. 思考力の芽生え
7. 自然との関わり･生命尊重
8. 数量･図形、文字等への関心･感覚
9. 言葉による伝え合い
10. 豊かな感性と表現

10 の姀の１つを選んでエピソードをつくり、おてて絵本にしてグループで発表し合おう。１つのエピソードの中に、10 の姀がいくつか包含されていることに気づくはず。
　知識や道徳性等 10 の姀は、様々に関連しながら日頃の遊びや生活を通して、子どもたちの中に芽生える。グループで話すことで、たくさんの芽生えに気づけたでしょう。小学校の授業や生活でも同じことが言えると思う。



おてて絵本（両手を本に見立て、物語を作り上げていく親子遊び。絵本作家サトシン（本名：佐藤 伸）が提唱されている即興で創作する「親子あそび」）を用いて。

〇大林先生より



左の図がカリキュラム作成イメージ。まずは、着目しやすい行事をどうしていったらいいかを考えることが，分りやすい。「10の姿」を手掛かりにして接続期を考える。
交流体験でも幼稚園側のねらいも含め、一緒に中身を考えていく。どう育てていこうかということを共に考えていくための架け橋期のカリキュラムなのです。

＜連携にむけて＞

〇組織的な取組へ

「チーム架け橋」“チーム架け橋”を誕生させる　**まずは！知り合いましょう！これだけの先生がいる！**

「架け橋コーナー」“チーム架け橋”で架け橋コーナーをつくる　**見える化**

（掲示は、園も小学校もかかわりのあるものがいい。生活の分かるもの・クイズ形式にするのも楽しい）

「小学校会場の交流会の開催」“チーム架け橋”　幼保小連携・接続主任による企画

校長先生のリーダーシップで！　年１回から　**すぐに声をかけあえる関係になれるように！**

〇保育・指導の取組へ

「学年・クラス、わたしのお気に入りの場所」　**場所が変わって環境・友達関係が変化　「きっかけ」に！**

・認知力　・自己コントロール力（制御能力）の育成・安心と人間関係

「毎日の発見」**オノマトペを使って**　再現したりするなど、経験と知識をつなぐ言語活動

「経験を疑似的体験に置き換える」これまでに経験したことを、疑似的経験に置き換えて、操作する。

経験をたくさん積んでおくことが、小学校の疑似的な経験に置き換えるときに役に立つ

＜参加された方からは・・・＞

本日はありがとうございました。保幼小連携、架け橋プログラムについて、どこか難しいと感じていましたが、グループ協議等しながら楽しく学ばせていただくことができました。学んだことを生かしていきたいと思います。

グループの先生との対話や、やりとりの回数が増えると、思いを表現する気持ちが高まりました。先生同士の距離が近づくことで、楽しい気持ちが膨らみました。連携でも活用していきたいです。

具体的に幼保小連携・接続の何から始めていけばよいのかのヒントを得られました。ぜひとも近隣の小学校の先生方と共有したいです。

小学校の先生とも交流させて頂いたり、ロールプレイがあったりと、色々な方法で子どもの育ちの見方を学ぶことができました。今後の幼保小接続の取組に返していけたらと思います。

おてて絵本「10の姿」を作る時、戸惑いましたが、保育園・幼稚園の先生方の話を伺い、子どもたちの姿がよくわかりました。

架け橋期にはまず幼保小でお互いのことを知るということがスタートの第一歩だと思いました。

今回の研修には、小学校からの参加が多く、全てのグループが就学前施設と小学校の先生方で話し合うことができました。御参加された皆さんがとても楽しそうに討議をされている姿がとても印象的でした。

顔を見合わせながら話をすることの大切さを改めて感じ、様々な場所で架け橋が架かっていくお手伝いをできたら嬉しいと改めて考えることができました。皆様、ありがとうございました。

こどもみらい館　第６期研究プロジェクト

心の育ちをつなぐ保幼小連携・接続（IN たかつかさ保育園）

平成１６年度から推進してきた、こどもみらい館の研究事業。令和４年度からは「心の育ちをつなぐ保幼小連携・接続」をテーマに、第６期研究プロジェクトに取り組んでいます。

６月に実施した大将軍小学校での取り組みに続いて、今回は、たかつかさ保育園を見学し、その後大将軍小学校へ移動し、エピソード検討会を実施しました。たかつかさ保育園が園を公開して下さったことで、就学前施設の横のつながりの大切さを再確認することができました。引き続き「子どもを真ん中にして、大人同士が語り合いつながりたい」「子どもの心に目を向け、その育ちを肯定的に捉えたい」という願いを持ち、保幼小連携・接続の取組を進めます。

たかつかさ保育園見学

- それぞれの子どもが、遊びを見つけ楽しめる環境の工夫
- 季節を感じられる沢山の樹木のある園庭
- 一人一人を大切にする職員集団と具体的な取組
- 居場所を見つけ、落ち着ける環境
- 保護者との取組

「素敵な環境、園児に添った生活。私も通いたい！と思う程でした。」

「他園へ行かせていただくことがほとんどなく、大変勉強になりました。」

大将軍小学校をお借りして エピソード検討会

池添園長のエピソード（こどもみらい館第５期研究プロジェクト冊子より）を使って実施しました。

『集団に馴染みづらい、と転園してきたしょう君。部屋から出ていく、給食は食べない、人とのやり取りは苦手、高い所が好きで危険がいっぱい。そんなしょう君が、集団遊びの時、保育者の呼びかけに「うんち」と言った。子どもはみんな大笑い。その時、保育者は…。』

自分ならどう関わるか、心を育てるとはどういうことか、といった視点で、エピソードや保育見学で感じた事などを話し合いました。

エピソードは
ホームページに掲載中

参加者の声（アンケートより）

- 普段、他園の見学に行く機会はほとんどないので、とても刺激を受け、勉強させていただきました。
- たかつかさ保育園の素敵な施設や園庭の工夫を知ることができ、とても勉強になりました。
- エピソード検討会では、「私ならどうしただろう」と考えながら、子ども主体に関わることの大切さを、改めて考える機会になりました。
- 実際の保育でのエピソードを知る事で、保育されている先生方の考え方や価値観を知ることができたのが、最も大きい収穫でした。
- エピソードを通じて、保育者の力量、観察眼、感性、感覚が、どれほど重要であるかを感じました。一人一人を大切にすること、そして全員が認められ、大切な一員であること。日々の保育を考えて行きたいと思いました。
- 保幼小の接続をする中で、保幼の考え方、価値観を知る事は、我々小学校教員にはとても大切だと感じました。

子どもを育む喜びを感じ、
親も育ち学べる取組を進めます。

［京都はぐくみ憲章］より

「はぐくみ文化」を未来の京都へ

この印刷物が
不要になれば
「雑がみ」として
古紙回収等へ！

発行日　令和5年10月12日
発行者　京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
〒604-0883　中京区間之町通竹屋町下る楠町 601-1
Tel ： (075)254-5001　Fax ： (075)212-9909
URL ： https://www.kodomomirai.city.kyoto.lg.jp/